

シリーズ「貧困考」 NO.1

子ども達の状況

小学校教員(女)レポート

私が働いている小学校の子どもたちは、生活に余裕のない家庭が多い。お金の余裕がない、隙間の時間も働かなきゃいけないから時間に余裕がない、追われる毎日だからこれからの生活を考える余裕がない、もちろん子どものことを考える余裕もない。

子ども達は、そんな親の疲れた背中をみて、十分と言っていいくらいの何かを感じていると思う。そう思うのは、親に気を遣って過ごす子がとても多いからだ。

親が遅くまで働いていて子どもと顔を合わす時間が少ない、という家庭は以前からあった。ところが、今は夜勤だ。それも、お母さんが夜勤だったり、母子家庭のお母さんに夜勤が多い。夜中一人で過ごす子なんて、珍しくもない。コンビニのラーメンとスナック菓子を買ってきて、玄関を開けると、ラーメンをすするとき、布団に入るとき、その子は何を思うんだろう。

家計を切り詰めて、塾の費用にあてる。生活が楽ではないから、なるべく安い塾に通わせる。どのように勉強に向き合っているのかを子どもと話す時間はないから、点数や成績が判断材料になる。お金を払って塾に通わせているんだから「学校でしっかり学べ」なんて親も思わない。そして「なんで塾に行っているのにできないんだ」というような、会話とはいえないようなやり取りになってしまう。親も子どもも、お互いに必死なのに。

私も子ども時代を貧困の中で生きてきたから、余裕がない、貧しいという感覚は肌でわかるつもりだ。給食費を払えないとか、部活の用具をそろえられないとか、親自身が生活を回せない日常は当たり前だった。それでも、今の子ども達とは、何かが違う気がする。私が子どものころは、まだ「貧困」がそれぞれの目に見えていた。「うちも大変だけど、あの子もきっとそう。」私にとっての日常は、教室の隣の席に座っている子にとっての日常でもあった。

今は、分断された孤島で、親子で身を寄せ合って必死に生きているように見える。困った状況に陥っても、どう動いたらいいのか分からないから、基本的に困ったままの状態が継続する。孤立した貧困は、お金の追われ、時間に追われ、ついには住むところも追われることもあるのが現実。抜け出せないものは、抜け出せない。

道で転んだ時、誰かが手を貸してくれたら意外と簡単に起き上がれるものだけど、自分ではなかなか起き上がれない。誰かが道で転んだら、周りの人はどうするのだろう。「手を差し伸べる」眼差しから、「転んだあなたが悪いでしょ」の眼差しへ、そしてさらには、「私が通るのに邪魔です」の眼差しへ。転んだ人はもう起き上がらなくていい存在なのか、そんな世の中の空気を子ども達はきっと感じていると思う。

いまや世界のいたるところで、「格差と貧困」が大きな問題となっている。世界を覆いつくす資本主義の「帰結」や「終焉」の姿として指摘する経済学者も少なくない。もちろん日本も例外ではなく、「格差と貧困」が社会問題化する一方で、教育にかかわる課題としても浮上している。しかもそれは、「平等と公平」という教育の根本の理念に関わることとして提示されつつある。もちろん、教育の根本理念に関わる

ということは、人権に関わる問題であると言っても過言ではないのに違いない。

しかしここに、「格差と貧困」の問題が、学校現場ではまだまだ実感として捉えられていないということも、指摘しておかなければならない事実である。そして、その原因として考えられることは、三つ。

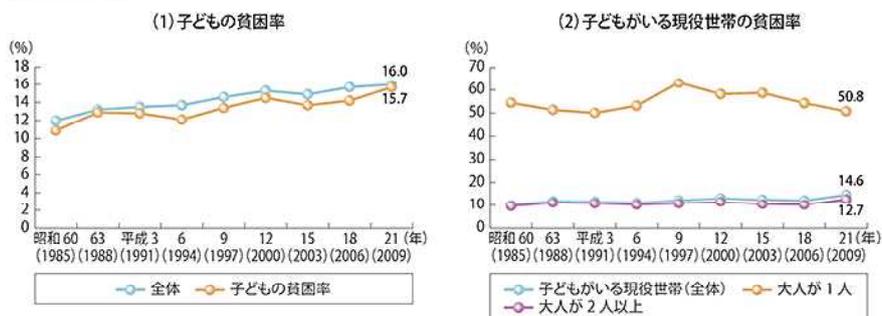
一つ目は、「日本は豊かである」という高度経済成長時代の幻想が、日本社会の意識の底流を形成しており、「格差と貧困」が進行していながらも、私たちがそれを正面から見据えることをしてこなかった。そのため現在の状況を、「突然目の前に現れた事実」であるかのように錯覚していること。だからこのような時代になっても、教室で子どもたちに、または、保護者に向かって、「貧困」を口にすることは「失礼なこと」のように感じ、抵抗がある先生のほうが多いのではないだろうか。

二つ目は、「貧困」といっても、現在の貧困は「見えにくい」といわれる実態があること。「人並み」を最良の価値観として、「周囲から目立たない」ことを追い求める行動原理が、最低程度の消費行動を優先させ、ものがあふれる時代であるからこそ、「困窮」は外側からは見えにくいし、家庭からの積極的な発信もない。

三つ目は、自戒的に述べなければならないことだが、私たち教職員が「貧困」からは遠いところで生活していることからくる、われわれの「鈍感さ」である。一つ目の原因に関係するが、新自由主義が浸透し始めたころ、盛んに言われた言葉が「自己選択・自己責任」である。こうした時代背景の中、現在の教職員には、「勝ち組」意識があるはずだ。これは、新自由主義を内面化したともいえる。そして、実際に、私たち教職員の仲間で「貧困」に

直面している人にはお目にかからない。つまり、「格差や貧困」を感じ取るような「皮膚感覚」を私たちは持っていないのである。ならば、想像力を最大限に働かせなければならないのだが、どこから、「どうせ、せんせいたちにはわからないよ・・・！」という子どもや親の声が届いてきそうな気がする。

第1-3-38図 相対的貧困率



(出典) 厚生労働省「国民生活基礎調査」
(注) 1. 相対的貧困率は、OECDの作成基準に基づき、等価可処分所得(世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得)の中央値の半分に満たない世帯員の割合を算出したものを用いて算出。
2. 平成6年の数値は仮推定を記したものである。
3. 大人とは18歳以上の者、子どもとは17歳以下の者、現役世帯とは世帯主が18歳以上65歳未満の世帯をいう。
4. 等価可処分所得金額が不詳の世帯員は除く。

子ども達やその家庭が直面している「格差と貧困」に対し、私たちは、見えないものを見、聞こえないものを聞く努力を、今こそしなければならぬと思う。幼き子ども達に対し、「平等と公平」をまず口にする大人が、学校の先生という「役割」なのだから・・・。

この「Ed.ベン便り」では、教室から見える貧困の実相を手がかりに、何回かに渡って、「格差と貧困」について、少し深く考えてみたい。

教育講演会のお知らせ

演題：「グローバリズムの果て」を問うー新自由主義への決別と創造の意志ー

講師：平川克美氏（実業家・文筆家・立教大学特任教授）

日時：2016年2月21日（日）午後1時半～（予定）

場所：大和市勤労福祉会館3階ホール

【理事の独り言】最近ではITの技術的発展が目まぐるしく「人工知能」と呼ばれる分野において、ビジネス革命・生活の革新をもたらすと注目されている。しかしそれにより様々な”人の仕事”がなくなっていくことが危惧されている。私自身もそのITを駆使し、業務効率化をシステムで行うべく従事している身である。そんな中、親の勤務先の廃業(統廃合)により、来年親の職が失われることを告げられる。結局、自分自身も”搾取”や”排除”の肩入れをしているのではないかとときどきおろろろを感じる。(CN)